

## 「取税人レビ」

ルカの福音書 5:27~35

### はじめに

今日の箇所には「取税人」と呼ばれる職業の人々が登場します。福音書に記されている取税人はおもにローマ帝国の税金（租税や関税）を取り立てる徴税請負人や集金に当る下級税吏（役人）のことです。新約聖書の時代、地方の租税や関税はローマ帝国によって直接徴収されず、徴税請負人に請け負われていました。この請負人はさらに下級官吏（たいていの場合、被征服民族から採用）に税金を徴収させていました。こうすることによりローマ帝国は危険や損失なしに確実に収入を得ることができたのです。こういう徴税システムの中で、徴税請負人と集金人はできるかぎり金儲けをしようと試みました。ローマ政府は税額の査定をするだけで、その取り立ては取税人に任せただけで、取税人は相当の利幅をとって私腹を肥やすことができました。民がこうしたことを訴えても、ローマ政府は確かな収入源を失いたくないので耳を貸しませんでした（ルカ 3:12~13、19:8）。このことのゆえに取税人はローマの属州の至る所で同胞に憎まれ、ここユダヤにおいても例外ではありませんでした。取税人は「強奪者」と目され、嫌悪の的となっていました。特に厳格なユダヤ人は、取税人が常に異邦人と接触していたことから「汚れた者」罪人と見なしていました。（マタイ 9:10、マルコ 2:15~16、ルカ 5:30、7:34、15:1、19:2~7）。また彼らは異邦人（マタイ 5:46~47、18:17）や遊女（マタイ 21:31）と同じ範疇に入れられていたのです。今日はそんな取税人とイエシュアとの関わりが描かれた箇所ですが、これもいつものようにヘブル語の最初の言及を通して見える、神のご計画の「型」として捉え、読み進んでまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

### 1. 取税人レビ

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:27 その後、イエスは出て行き、収税所に座っているレビという取税人に目を留められた。そして「わたしについて来なさい」と言われた。

一般的に私たちは「税金、〇〇税」と聞くとそれは自分の収入、財産の中から支払う、搾取されるものと考えます。しかしこれを意味するヘブル語のメヘス(מֶחֶס)は本来、そのような意味とは少し異なっていました。

民数記【新改訳 2017】

31:25 【主】はモーセに言われた。

31:26 「あなたと祭司エルアザル、および会衆の氏族のかしらたちは、人でも家畜でも捕らえて分捕ったものの総数を調べ、

31:27 その分捕ったものを、戦に出た者たちと全会衆の間で二分せよ。

31:28 戦に出た戦士たちからは、人、牛、ろば、羊の中からそれぞれ五百のうち一を、【主】への貢ぎとして徴収せよ。

これはモーセの時代、イスラエルが他民族すなわち異邦人との戦によって敵から「分捕ったもの」いわゆる戦利品について、神である主が定められたものです。ここで「貢ぎ」と訳されているのが聖書で最初のメヘスです。このようにメヘスとは本来、人が仕事をして得た収穫、収入から、というよりもむしろ敵から、すなわちイスラエルにとっての「異邦人」から「分捕ったもの」奪ったものの中から納める、主にささげるものという意味を持った言葉なのです。そしてそれは「人でも家畜でも」、また「人、牛、ろば、羊」とあるように、メヘスの筆頭、代表的存在、それは「人」すなわち異邦人そのものだったのです。つまり「税」メヘスには、異邦人を主にささげるという意味が秘められているのです。またイエシュアが目を留められた取税人「レビ」という名はイスラエル十二部族の中で、祭司の部族として選ばれ、先祖代々幕屋や神殿において主に仕えたレビ族と同名であり、この名には「(夫と妻を)結びつける(創世記 29:34)」という意味があります。これらの事実と、また冒頭で述べた、当時異邦人同然に見られた取税人の存在から、このイエシュアが目を留められ、召し出された「レビという取税人」には、やがて「神の国」においてその王となられるイエシュアの御前に祭司として仕え、またイエシュアの妻すなわちメシアの花嫁として結びつけられる、私たち異邦人の教会の存在が表されているのです。

## 2. すべてを捨てて立ち上がる

5:28 するとレビは、すべてを捨てて立ち上がり、イエスに従った。

「するとレビは、すべてを捨てて…」とあります。ここで「捨てる」という意味で使われるアーザヴ(אָזַב)は本来、創世記 2:24 の「それゆえ、男は父と母を離れ (アーザヴ)、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」という事実を指し示しており、使徒パウロはこれはキリストすなわちメシアと教会を指し示したものだと言っています。

エペソ人への手紙【新改訳 2017】

5:31 「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」

5:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。

またレビは「立ち上がり」ました。ここに使われている「立つ、起きる」という意味のクーム(קוּם)は本来、以下の出来事で用いられました。

創世記【新改訳 2017】

4:4 【主】はアベルとそのささげ物に目を留められた。

4:5 しかし、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それでカインは激しく怒り、顔を伏せた。

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

これはアダムの子カインとアベルの出来事です。ここで「カインは弟アベルに襲いかかって殺した」とあり、ここに聖書で最初のクームが使われています。このようにクームには本来、主に選ばれた者を殺す、というような意味があるのです。主に選ばれた者、主が目を留められた者、その究極的存在は神の御子イエシュアです。ではイエシュアを殺すとはどういうことでしょうか。それはイエシュアの十字架の

死であり、その原因となった私たち人の罪です。このイエシュアの十字架の死により、私たち教会は罪赦され、神に仕える、御子イエシュアの妻すなわち父なる神の子どもとされる特権を得ました。取税人レビの一見何の変哲もない描写に見えるこの物言わぬ行動には、私たち教会が、異邦人でありながら神に選ばれ、御子イエシュアの死という代償によって罪赦され、イスラエルと同様に神の所有の民とされる経緯、神のご計画が「型」となって表されているのです。

### 3. 盛大なもてなし

5:29 それからレビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした。取税人たちやほかの人たちが大勢、ともに食卓に着いていた。

5:30 すると、パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって小声で文句を言った。「なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか。」

5:31 そこでイエスは彼らに答えられた。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です。

5:32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」

レビは「**盛大なもてなしをした**」とあります。ここには「行う、実行する」という意味のアーサー(הִשָּׁר)と「宴会」という意味のミシュテ(מִשְׁתֵּה)という二つの言葉が使われています。それぞれの最初の言及を見てみましょう。

#### 創世記【新改訳 2017】

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の真ただ中であれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:7 神は大空を**造り**、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。すると、そのようになった。

1:8 神は大空を天と名づけられた。夕があり、朝があった。第二日。

#### 創世記【新改訳 2017】

19:1 その二人の御使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところに座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に付けて伏し拝んだ。

19:3 …ロトがしきりに勧めたので、彼らは彼のところに立ち寄り、家の中に入った。ロトは種なしパンを焼き、彼らのために**ごちそうを作った**。こうして彼らは食事をした。

天地創造の第二日、神は大空をアーサー「**造り**」、天の上と下に水を分けられました。このようにアーサーには本来、それまで地にあったもののその一部を切り分けて、天の上にあるものとする、というような意味があるのです。ちなみに先ほど取りあげた「税」という意味のメヘスにも分捕りものを「**二分せよ**」二つに分けるというような規定が盛り込まれていました。

そして次に天からの火と硫黄によって滅ぼされる直前のソドムの町において、アブラハムの甥ロトの家において、御使いをもてなした宴が聖書で最初のミシュテです。この後ロトは御使いたちによって町から引き出され、滅びを免れます(創世記 19:16)。つまりこの宴、ミシュテに招かれた、集められた者たちだけが救われたのです。上記の二つの御言葉、出来事が指し示す神のご計画がお分かりいただけるでしょ

うか。それはもちろんイエシュアの空中再臨による教会の携挙です。やがてイエシュアが御使いたちとともに空中、大空に現れるその時、私たち教会はよみがえり、地から分かれたれ、天へと引き上げられるのです。それはその後にあのソドムとゴモラに降りかかった滅びよりもはるかに激しい災厄が地に及ぶからです。その滅びを前に引き出され、引き上げられ、イエシュアとともに天へと迎えられるという、そのような事実が、神のご計画の「型」が、このレビの行った「**盛大なもてなし**」には秘められているのです。このような真理は、自分たちこそが、イスラエルだけが神の民だと信じ切っているパリサイ人や律法学者のようなユダヤ人たちにはとうてい受け入れがたい事実です。そのような彼らの心理が、ここで「**小声で文句を言っ**」ているという状態に見事に表されています。このように、私たち異邦人の教会は携挙されます。しかし選民ユダヤ人、イスラエルは地に残されます。それは彼らが御子イエシュアをメシアとして信じず、受け入れず、かえってこれを十字架にかけて殺してしまったという罪に目が開かれ、泣いて悔い改めさせるためです。その事実が次に示されています。

#### 4. 断食

5:33 また彼らはイエスに言った。「ヨハネの弟子たちはよく断食をし、祈りをしています。パリサイ人の弟子たちも同じです。ところが、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています。」

5:34 イエスは彼らに言われた。「花婿と一緒にいるのに、花婿に付き添う友人たちに断食させることが、あなたがたにできますか。」

5:35 しかし、やがて時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」

「断食」する、これをヘブル語でツーム(צום)と言います。この最初の言及は以下のものです。

#### 士師記【新改訳 2017】

20:26 イスラエルの子らはみな、こぞってベテルに上って行って泣き、そこで【主】の前に座り、その日は夕方まで断食をし、全焼のささげ物と交わりのいけにえを【主】の前に献げた。

20:27 イスラエルの子らは【主】に伺った——当時、神の契約の箱はそこにあり、

20:28 また当時、アロンの子エルアザルの子ピネハスが、御前に仕えていた——

ここでイスラエルの民は「神の契約の箱」と大祭司の前に集まり、嘆き悲しみ、そしてツーム「断食をし」たとあります。その理由は戦で同じ相手に二度も大敗を喫してしまったからです。しかもその相手とは同胞であるベニヤミン族で、彼らが「イスラエルの子らがエジプトの地から上って来た日から今日まで、このようなことは起こったこともなければ、見たこともない。(士師記 19:30)」と言わしめるほどの忌まわしき罪を犯したため、これを肅正し、悪を除き去ろうと他の全イスラエルの部族が団結して立ち上がり、戦いのぞんだのですが、たった一部族にすぎないベニヤミンの前に、イスラエルは二度までも大敗を喫してしまったのです。正義はこちらにあるはずなのになぜだ、というような怒りにも似た悲しみがイスラエルを覆いました。なぜ我々がこんな目にあうのか、主よ助けてください、あわれんでください。そのようなイスラエルの民の嘆き悲しみが表されたのがこの「断食する」ツームです。

やがて終わりの日に、イスラエルの上にこれと同じように一堂に会して嘆く日が来ます。しかしそれは戦に敗れた悲しみではなく、自分たちから「花婿が取り去られた」日です。ツームのこの最初の言及をとおして見るならばこの「花婿」とは「神の契約の箱」とそれに仕える祭司たち、すなわちエルサレム神殿（における礼拝）です。もちろん究極的には花婿とはメシアであるイエシュアを指し示しますが、イエシュアがやがて地上再臨され、そこに王座を設けられるエルサレム神殿とそこに仕える祭司の民イスラエルの存在は、神のご計画において非常に重要です。過去二度に渡り、彼らのそれは破壊されてきました。しかし終わりの日に再び起こるこの「イスラエルの子らがエジプトの地から上って来た日から今日まで、このようなことは起こったこともなければ、見たこともない」という悲劇のために、エルサレム第三神殿はまもなく建てられます。そして時を同じくして現れる黙示録の獣、反キリストによってこれが奪われます。それがイエシュアがここで暗示しておられる「花婿が取り去られた…その日」なのです。しかしその断食に表されるイスラエルの嘆きこそが花婿イエシュアを再びこの地上にお迎えするために必要な出来事なのです。こう預言されているとおりです。

#### ゼカリヤ書【新改訳 2017】

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

「その日」、イスラエルの残りの者たちは「恵みと嘆願の霊を注」がれ、自分たちの誤り、誤解に気づかれます、そして十字架で「自分たちが突き刺した者」イエシュアこそが神の御子メシアであったことに目が開かれ「激しく泣く」ことになります。この嘆きはもちろん自分たちが神の前に罪人であることを表す行為です。そこにイエシュアは帰って来られます。それはまさに「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」とあるとおりです。

## 5. 悔い改める

今日、今一度皆さんとご一緒に確認しておきたいことがあります。それは、私たちは今、神の前に罪人であるということです。もちろんイエシュアの十字架の死によってその罪はすでに赦されています。しかし今私たちが罪人としてのその行いをやめることはできていません。「悔い改める」とは一般的には悪いことをやめ、正しいことを行うことを指しますが、それはあくまで自分の考えや知識、価値基準に基づくものであり、神の基準にはとうてい及びません。ではどうすれば神の前に「悔い改める」ことができるのでしょうか。ヘブル語でこれをシューヴ(שוב)といい、それは本来、肉体が死んで塵に戻ることを意味します(創世記 3:19)。つまり神の前に「悔い改める」とは、今のこの朽ちる身体から、不死の肉体、永遠のいのちの身体に造り変えられることを指すのです。すなわちこう記されているとおりです。

#### コリント人への手紙 I【新改訳 2017】

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに換えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは換えられるのです。

15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

これが、これこそが「悔い改め」です。自分で自分を正したり、少し考え方を変えたり、生き方を変えてみたりした程度でなせるものではありません。このように「悔い改め」とは人の業ではありません。神の奇蹟の御業、神の「奥義」すなわち秘められたそのご計画なのです。そしてそれは私たちの主イエシュアの再臨によって、この御方が建てられる「神の国」に迎え入れられ、そこで生きることによって成就します。ですから「主イエシュアよ、来てください」と、今日も祈り求めましょう。聖霊の助けがありますように。